

Title	北京古人類の食料
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.14, No.4 (1936. 3) ,p.152(690)- 152(690)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360300-0152

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

北京古人類の食料

近着の Scientific American (January 1936) にカリフォルニア大學古生物學部 Chairman たゞ Dr. Ralph W. Chaney 氏が The Food of Peking man といふ小文を書いてをる。北平の西なる周口店の石灰洞から發見せられた第四紀初期人類の化石遺骨及びその遺物類が最近の世界學界に驚異の波紋をなげたことは既に著名な事件であるが著者は現地を訪問したと見え、その状況を詳細に記し、數呎の灰層の中から發見せられる馬や野牛や犀その他の野獸の焼けた骨片は當時の穴居人の食料の殘存であらうとなし、更にそれより上二十呎ばかりの所硅石器具や骨片を無數に含む角礫岩 breccia の中に數吋の厚さに無數の Hackberry (エノキ屬) の實の殼の粉末のあることを注意し、之がこの古人類の食用に供せられたことを主張してをる。氏によればこの植物は半乾燥斜面及び小流の縁に生える灌木で發育に日光を要し、洞穴内に風力か水力かで運ばれたり、又は自生したと認める證據なく、何物かにより採取され、洞内に運ばれ、くだいて食せられたものに相違ない。この實は今日合衆國の乾燥地帯で鳥や齧齒類の動物やアメリカ印度人の食用に供せられてをるが、周口店の殼の粉末を齧齒類の所行と見ることは不可能である。この類の動物はその殼の一方の側に穴をかじり明けて其處から實をとるべく、殼をくだくとは考へられぬ。加州大學で試験した所によれば檻中の齧齒類は餓えてゐない爲か不慣の爲かこの實に觸れず、また猿はガリガリ咬んで之も丸呑にしたが支那のこの時代には猿は棲息してゐないから問題とならぬ。結局周口店の殼の殘骸は洞穴人の食料の殘滓と考へられる。當時の北平附近は氣候が寒冷でかつ乾燥し、果實に乏しく、北京人類は住居の附近の藪から Hackberry の實を採取しては之をくだいて食料とした状態は今日の合衆國南西部の印度人の如き狀があつたらうと推測してをる(松本信廣)。